

# 北上川における景観形成計画について

## Landscaping plan for the Kitakami River

研究第三部 主任研究員 城戸 和寿  
研究第三部 部長 大嶋 吉雄  
研究第三部 主任研究員 高橋 達也  
三井共同建設コンサルタント(株) 高橋 恵一

北上川は、雄大な原風景を有する東北屈指の大河であるとともに、その昔は舟運をはじめとする人と川とのかかわりが歴史的、文化的にも深く地域に親しまれてきた川である。

これまで、河川全体で統一された景観形成に関する具体的計画がないため、個々の事象（対象箇所及びその前後に限定された狭いエリア）に対する景観を考えていたケースが多く、そのため、その場の上下流を含めた風景にそぐわない違和感のある景観を創り出すこともあった。

本研究は、北上川の良好な景観を次世代に継承していくために、現状の景観構造の分析結果や住民が抱く北上川のイメージを整理するとともに、川を主体とした景観マスタープランとして景観形成計画を策定し、河川事業や河川周辺での様々な事業を実施する際のガイドラインとして景観にあった事業が実施されるようアウトラインを定めた。

なお、本研究における検討対象範囲は、四十四田ダム～宮城県境（岩手河川国道事務所管内）である。

**キーワード：景観形成計画、景観特性、景観構造、地域、景観法、北上川**

Retaining grand, prototypical landscapes, the Kitakami River is one of the largest rivers in the Tohoku region. In the old days, the river used to be closely related to the history and culture of the communities in its drainage basin.

Because of the lack of a concrete plan for landscaping consistent throughout the river basin, past landscaping schemes focused in many cases on site-specific phenomena (at or around particular sites), often creating landscapes that are incongruous to the surroundings including the landscapes of the sections immediately upstream or downstream.

In this study, the results of analyses of the present landscape structure are described, and the images local residents have of the Kitakami River are reviewed. Then, a landscaping plan is drawn up as a landscape master plan focusing mainly on the river, and an outline is formulated so that by using the plan as a guideline, river projects and various other river-related projects can be designed so as to go well with the surrounding landscape.

This study focuses on the area from Shijushida Dam to the boundary with Miyagi Prefecture (within the jurisdiction of the Iwate Office of River and National Highway).

*Key words : landscaping plan, landscape characteristics, landscape structure, locality, Landscape Act, Kitakami River*

# 1. はじめに

北上川は、岩手県岩手郡御堂にある弓弭（ゆはず）を源流として岩手県・宮城県を貫流する全長約250kmの東北随一の大河である。北上川は、盛岡市をはじめとする幾つかの都市あるいは田園を抜けて宮城県境へと流れていき、その沿川には魅力的な風景が広がっている。

本研究では、岩手河川国道事務所管内（四十四田ダム～宮城県境）を対象として調査研究を行った。



図一 対象範囲

- 周辺土地利用をみると、河川に沿って都市が形成されているものの、多くは山地や丘陵地などの自然地や農地であり、全体として里山的、牧歌的な落ち着いた風景が形成されている。
- 全体的に無堤区間（山付き区間）が多く、水際には河畔林が連続的に繁茂している。これに対し、市街地沿いの区間では人工的な景観を見せる。

## 2-2 地域住民が抱く北上川の印象

### (1) 北上川全体に対する印象

北上川沿川の住民等（沿川住民、転出者等）を対象としたアンケート調査を実施し、地域住民が思い描く北上川の印象（イメージ）を把握した。

イメージの定量的な把握方法として、「危険な－安全な」、「自然な－人工的な」といった対立する性質・状態を用いて評価対象の与える心理的なイメージを、「非常に」、「かなり」等の7段階で回答を得るSD法を用いた。

#### 【北上川全体のイメージ】

##### ◎ スケール感が大きい

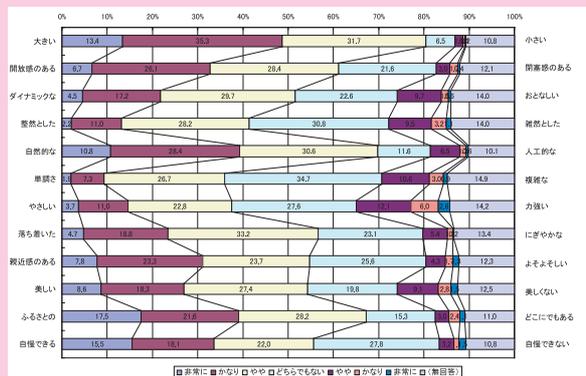
→ 「広々とした」「重みのある」「大きい」

##### ◎ ふるさとの風景である

→ 「歴史的な」「自然な」「親近感のある」「ふるさとの」「自慢できる」

#### 【北上川全体のイメージに関する調査結果】

	評価段階							得点	
	非常に	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	非常に		
	1	2	3	4	5	6	7		
大きい			●					2.4	小さい
開放感のある								2.9	閉鎖感のある
ダイナミックな			●					3.3	おとなしい
整然とした								3.6	雑然とした
自然な			●					2.8	人工的な
単純な								3.7	複雑な
やさしい								3.7	力強い
落ち着いた								3.1	にぎやかな
親近感のある								3.1	よそよそしい
美しい								3.2	美しい
ふるさとの								2.7	どこにもある
自慢できる								2.9	自慢できない



## 2. 北上川の景観の状況

### 2-1 景観構造

北上川の景観構造を分析すると、概ね次のようなものとなっている。

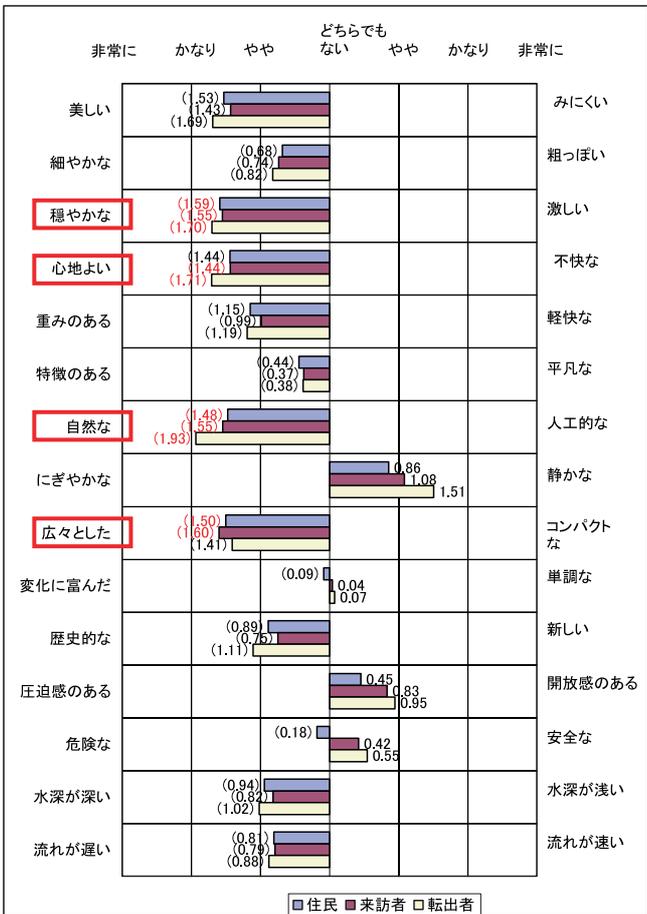
- 四十四田ダム～一関遊水地の間は、東に北上山地、西に奥羽山脈の挟まれた低地を北から南に流れている。
- 一関遊水地から下流側では、山地を削るように流れ、閉鎖感強いものの美しい渓谷美を見せている。

(2) 北上川の景域毎に対する印象

(1) と同様に北上川の景域毎のイメージについて調査・把握を行った。ここでは、4つの景域を例として示す。なお、分析結果は、“3-3 景域別景観形成方針”で述べる景域確定のための基礎資料とした。

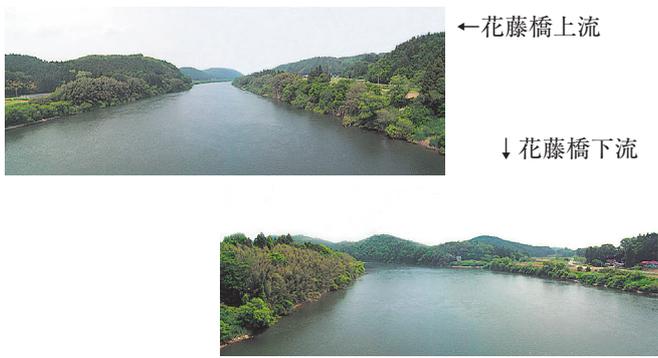
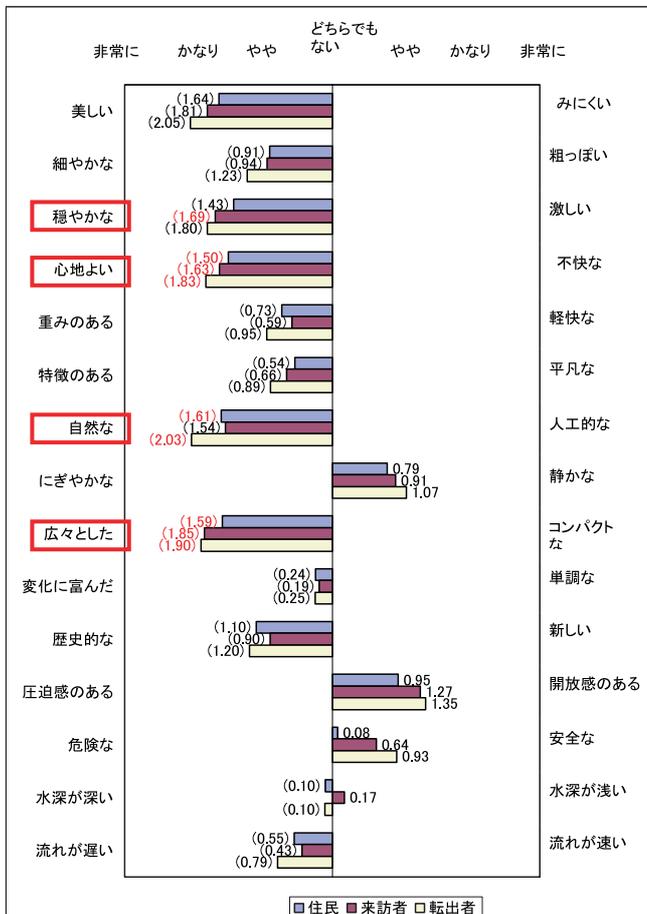
**【景域1】のイメージ**

- イメージ言語の上位回答
- ① 穏やかな
  - ② 心地よい
  - ③ 自然な
  - ④ 広々とした



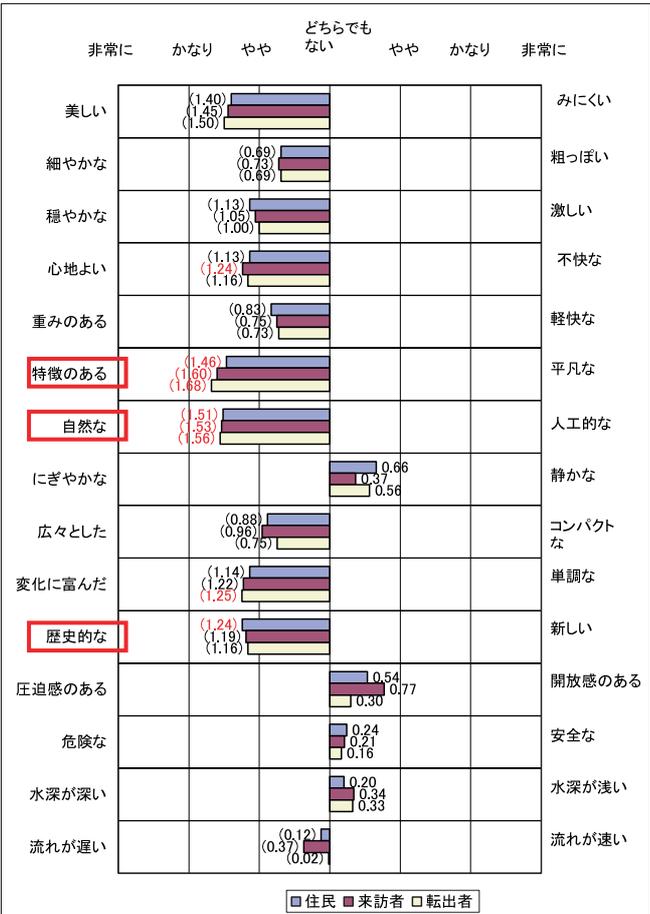
**【景域3】のイメージ**

- イメージ言語の上位回答
- ① 穏やかな
  - ② 心地よい
  - ③ 自然な
  - ④ 広々とした



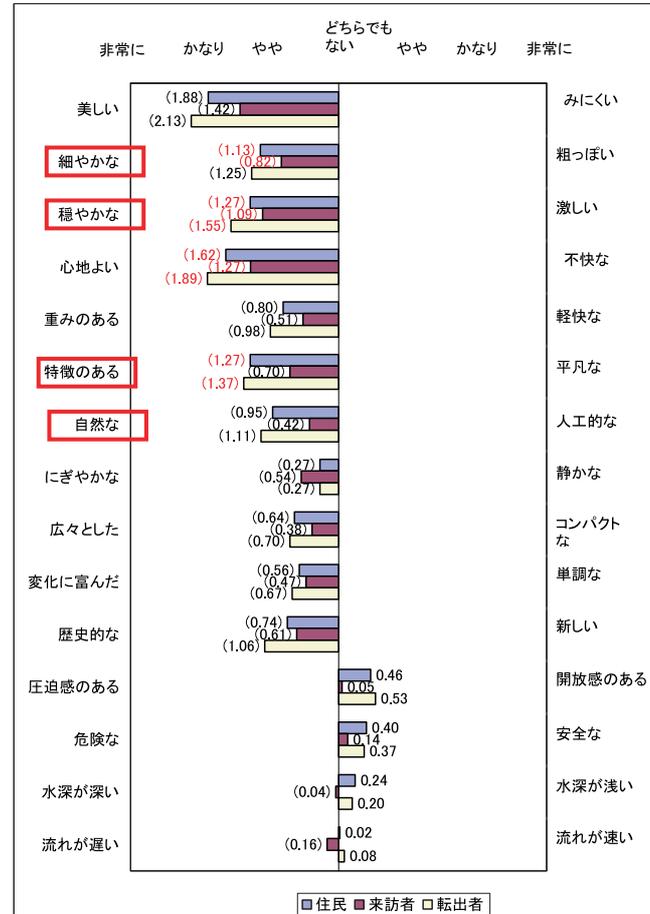
**【景域6】のイメージ**

- イメージ言語の上位回答
- ① 特徴のある
  - ② 自然な
  - ③ 歴史的な



**【景域8】のイメージ**

- イメージ言語の上位回答
- ① 細やかな
  - ② 穏やかな
  - ③ 特徴のある
  - ④ 自然な



↑ イギリス海岸



↑ 銀河大橋上流

↓ 朝日橋上流



↑ 明治橋上流



↑ 夕顔瀬橋上流 (※)

↓ 開運橋上流 (※)



(※) の写真は、岩手大学より提供して頂いたものである。

## 2-3 北上川の景観の特徴

北上川の景観構造および地域住民へのアンケート調査より、北上川の有する景観的特徴を整理すると次のようになる。

### 【北上川の景観の特徴】

- 北上川は川幅が広く、また空間が大きく感じられる開放的な印象を有する。
- 自然物が多く残され、特に水際の河畔林や流れの蛇行等の印象が強い。
- 全体的に周辺景観である沿川の街並みや山地等の景観とよく調和している。

## 2-4 北上川の景観資源と特性

地域住民へのアンケート調査より抽出された北上川の代表的な景観資源を、①自然系、②歴史系、③都市系、④心象系 の4つの景観特性に分類した。

### ①自然系

- ・ 一関市狐禅寺周辺の狭さく部
- ・ 前沢町の蛇行部と束稲山からの眺望
- ・ 花巻市のイギリス海岸など

### ②歴史系

- ・ 平泉町中尊寺物見台から見る北上川
- ・ 衣川村の衣川古戦場跡
- ・ 前沢町の昔の船着場

### ③都市系

- ・ 北上川に架かる橋（北上大橋、開運橋等）
- ・ 水沢市の「道の駅」
- ・ 前沢町の「牛の博物館」

### ④心象系

- ・ 展勝地の開花期の桜、白鳥の飛来地などの季節が限定される風景
- ・ 北上川に架かる橋（北上大橋、開運橋等）

## 3. 北上川の景観形成方針

### 3-1 景観形成の方向性

河川においては、洪水や土砂災害等から生命と財産を守るための河川改修や地すべり対策を実施するとともに、河川環境に配慮した事業を実施する必要がある。

一方、景観法の施行により、河川を含む景観上重要な施設は、周辺施設との関連性を保ちながらその場所の景観を構成する要素としての機能を担うことが求められる。

このことから、北上川における今後の景観形成上の方向性として、北上川およびその周辺の施設や広い意味での風景がその機能を担うべく、「景観構成型川づくり」を行うことを掲げるものとした。

### ■「景観構成型川づくり」とは…

北上川が本来有している景観の多面性に配慮し、良好な景観を保全あるいは創造するために、河川構造物や河川周辺の地物が北上川全体あるいはその中の景域毎に規定される景観形成方針に則った構成要素として整備あるいは保全されるようにする。

### 3-2 北上川全体の景観形成方針

北上川においては、地域住民の当該河川の印象などから河川や河川周辺の風景を一体的に見る傾向が高く、これがふるさと意識を育んでいるものと考えられる。

北上川の景観特性は、地形の構成要素としての雄大な川とその周辺の山々からなる複雑な空間構造であり、川と沿川風景が一体となった風景が人々を心安らかなふるさととしての意識をもたらしことに着目し、北上川全体の景観形成方針を定めた。



### 《景観形成方針》

雄大な川、ふるさとの川としての  
北上川の景観の保全、創出する

そのためには…

### 【景観形成に当たっての基本的考え方】

- ・ 川のスケールに合わせた景観をつくる
- ・ 周辺土地環境を活かした景観をつくる
- ・ 歴史や文化の痕跡を残した景観をつくる
- ・ 現存植生を活かした景観をつくる

### 3-3 景域別景観形成方針

#### (1) 景域分割

北上川の流路延長は長く、岩手河川国道事務所管内だけでも約150kmとなる。ここでは、景観的にある一定のまとまりを有する領域を「景域」として、景域毎に景観形成方針を策定し、新しい景観を創出する際、あるいは景観保全が必要な際のデザインを考える上での指標とする。

北上川においては、自然的な景観を持つ区間や歴史的特性が強い区間の入れ替わりのなかに都市的景観が繰り返し表出する特性を持っている。

このことを踏まえ、北上川における景域区分方法を図-2に、景域分割結果を図-3に示した。

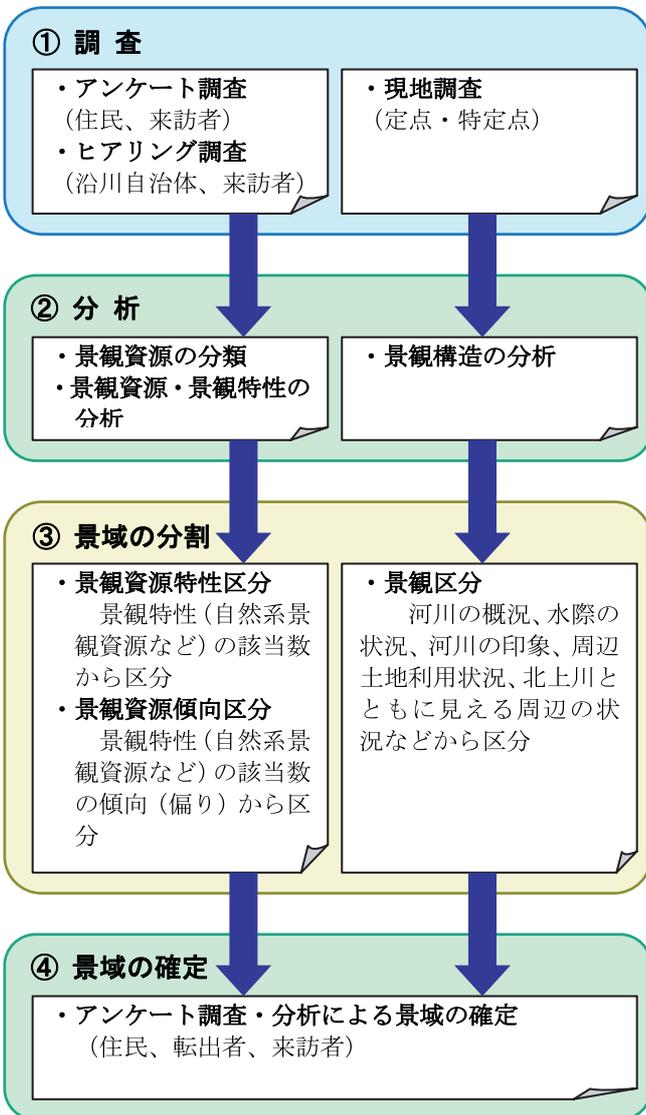


図-2 景域分割の考え方

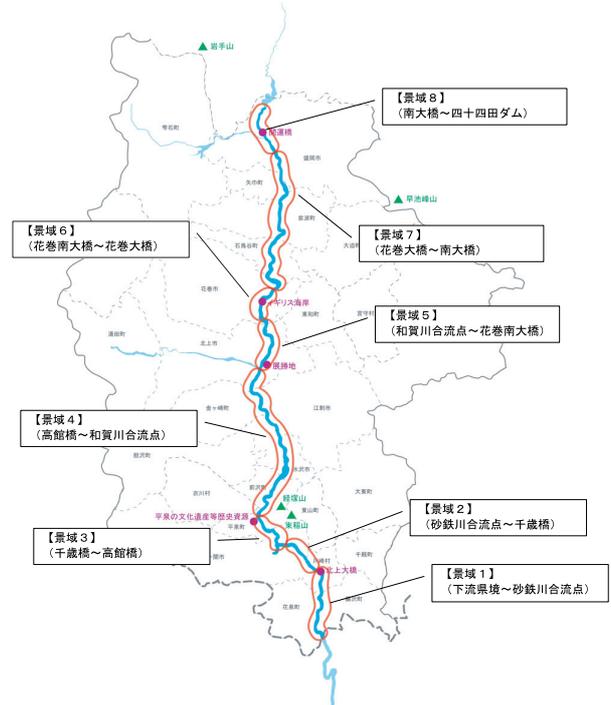


図-3 景域分割図

#### (2) 景域別景観形成方針

分割した8景域において、さらに地域の特性を活かした景観形成方針を策定した。

下記に【景域1】の景観形成方針を例として示す。

#### 【景域1】 県境～砂鉄川合流点

水面の雄大さを強調する河岸段丘とのつながりを意識する



水面と河岸段丘の距離が、上流に従い徐々に近くなる。平地から狭窄部へ移り変わる変化点としての景観は山を移し出す水面の色までも影響している。

このことから、この景域では、北上川とともに映し出される様々な事象が極めてデリケートに景観に表出し、河畔の緑が川面の広がり強調している。

沿川の河岸段丘の緑を保全し、この段丘と水際までの間に極力人工物を持ち込まないことを当景域の方針とする。

図-3 景域分割図

## 4. 北上川景観形成計画

### 4-1 景観づくりの留意点

北上川の景観形成を進めるうえで、その場所の景観特性の調和といった観点だけでなく、北上川全体の方針のなかで「どのような点に留意して景観づくりを行うか？」ということを考える必要がある。ここでは、先に述べた北上川全体の景観形成方針における【景観形成のための考え方】をもとに留意点を示した。

#### 【景観づくりの留意点】

##### ●川のスケールに合わせた景観をつくる

→ 北上川のスケールに合致したバランスの良い景観形成を推進する。

##### ●周辺土地環境を活かした景観をつくる

→ 自然環境の保全・活用、農地や市街地等の社会環境との一体化等、河川だけでなく土地環境を活かした総合的な景観形成を推進する。

##### ●歴史や文化の痕跡を残した景観をつくる

→ 高館山や束稲山、イギリス海岸などの歴史・文化を感じさせる場所と河川との関係を踏まえた景観形成を推進する。

##### ●現存植生を活かした景観をつくる

→ 水際の良好な河畔林の保全・活用による自然豊かな景観形成を推進する。

### 4-2 景観形成計画

#### (1) 対象部位とその手段

北上川において具体的な整備を考える場合、各部位の景観デザインの方向性を考えていく必要がある。景観形成にかかる主な対象部位とその形成手段を表-1に示すように整理した。

表-1 主な対象部位とその手段

区分	主な対象部位	景観形成手段(案)				
		配置	意匠	材料	工法	色彩
河道線形	河道線形	△	-	-	-	-
堤防	堤防	△	○	○	○	○
河川構造物	護岸、水制	△	○	○	○	○
	水門・樋門	△	○	○	○	○
	堰、頭首工	△	○	○	○	○
関連構造物	橋梁(道路・鉄道等)	△	○	○	○	○
その他	河川敷公園、菜園等	○	○	○	○	○
	河川沿いの工作物	△	△	△	△	△

○：積極的に対応する箇所

△：関係部局と調整を図りつつ対応する箇所

#### (2) 景域毎の景観形成方針

景観づくりの留意点および景観形成手段等を考慮し、景域毎(景域1~8)の景観形成方針を策定した。以下に【景域1】の例を示す。

#### 【景域1】県境～砂鉄川合流点

水面の雄大さを強調する河岸段丘とのつながりを意識する

沿川の河岸段丘の緑を保全し、この段丘と水際までの間に極力人工物を持ち込まないことを当景域の方針とする。



#### <<景域の特徴>>

##### ●川のスケール

→ 緩やかな丘陵に囲まれており、上流に行くにつれて河岸段丘が徐々に迫りつつあり、広がりのある空間から狭窄部への変化点であることを感じさせる。

##### ●周辺土地環境

→ 森林を中心とした自然風景が多く、平坦地は農地として利用されている。

##### ●歴史や文化、観光資源

→ 紅葉などの自然資源、橋のデザインや北上大橋などの都市・心象系資源が見られる。

##### ●現存植生

→ 川を縁取るような河畔林や河岸段丘には山と連続した河畔林も見られる。

#### <<景観形成手段(基本の方針)>>

- 堤防、護岸・水制  
自然風景と調和したデザインを基調とする。
- 水門、樋管、堰・頭首工等  
シンプルで控えめなデザインを基調とする。
- 道路橋・鉄道橋等  
シンプルで風景との対比に配慮したデザインを基調とする。
- 河川敷公園、河川沿いの工作物等  
自然的で控えめなデザインを基調とする。

## 5. おわりに

本研究では、北上川およびその沿川風景を含めた景観的特性を考慮した北上川全体および景域毎の景観形成方針を策定した。

しかしながら、本研究では時間的な制約もあり、景域というまとまった区域における各部位の景観形成方針までを策定するに止まった。今後、具体的な河川計画・設計に活かしていくためには、今回設定した景域を更に小分化した上で、河川全体から地先レベル（数キロ単位のエリア）までを一貫とした景観形成計画の策定が必要と考える。

最後に、本研究を進めるにあたっては、アンケート調査に関して学識者である岩手大学安藤教授のご指導を賜りました。また、岩手河川国道事務所の方々からの多大なるご支援とご協力を賜りました。ここにあらためて御礼申し上げます。

### <参考文献>

- 1) 安藤 昭・佐々木貴弘・赤谷隆一・佐々木栄洋・駒井拓也（1999）：「キュービックモデルによる里地地域のイメージ構造について－岩手県西根町を対象として－」，第13回環境情報科学論文集，環境情報科学センター
- 2) 佐々木貴弘（2002）：「多元的評価主体による里地景観のイメージ構造に関する研究」，平成13年度岩手大学大学院工学研究科生産開発工学専攻博士論文
- 3) リバーフロント整備センター（1993）：「川の風景を考える景観設計ガイドライン（護岸）」
- 4) 岩手県（1999）：「岩手県の景観の保全と創造に関する条例 関係例規集」
- 5) 島谷幸宏（1994）：「河川風景デザイン」，山海堂